ISSUE
87
Jan.-Mar. 2019

神戸アートビレッジセンター
Kobe Art Village Center

ART VILLAGE VOICE

あっと言う間に年が明けて、2019年！
去年は施設フル稼働のフェスティバルや、

2018年9月に「KAVCアートジャック2018」と題して、KAVCのホール、ギャラリー、シアター、リハーサル室、スタジオほか、エレベーターや廊下などの空間で総勢18組の劇団やアーティスト、パフォーマーが公演や展示を展開。普段入れないバックヤードも舞台となった。

商店街が舞台のダンス公演、神戸の

2018年11月、舞台芸術集団「山猫団」とブラスバンド「三田村管打団？」、19才から83才までの一般参加者で結成された「新開地舞踊歌劇団」による公演。商店街を練り歩きながらパフォーマンスを行った。

映画館をつなぐ映画祭などなど、

神戸のミニシアター4館（KAVC、パルシネマしんこうえん、Cinema KOBE、元町映画館）がタッグを組んだ合同映画祭「KOBE CINEMA PORTフェス2018」。

盛りだくさんの1年やったなぁ。
今年一発目は、昨年64組のなか
から選ばれたアートユニットが、
スリリングな展示とパフォーマンスを

2018年度からスタートしたアートプログラム「ART LEAP」の展示を2019年2月23日（土）～3月17日（日）に開催！
ポールダンサーと美術家による異色のコラボレーションを、KAVC内の3施設で複合的に展開。

見せたるで！　平成最後もはり
きっていこか～～。本年も、
よろしくお願いしま～す！

ART VILLAGE VOICE —— CONTENTS

NEW KAVC！

新しいKAVC、なにがはじまるの？　アートプログラム「ART LEAP 2018」
STORY KAVC保安のおっちゃん今昔物語｜STAFF's VOICE KAVCからのお知らせ
KAVCと行く！新開地探訪 ～道具と人とまちのスケールを感じる編～
KAVC これ、見た？ REVIEW レビュアー：小岩秀太郎｜新開地新名物 vol.4 ポートピア神戸新開地の「警備員のおっちゃん」
EVENT SCHEDULE 2019.01-03｜神戸みちくさ天国｜わたしのとびきり！ランキング2018

www.kavc.or.jp

NEW KAVC!

新しいKAVC、なにがはじまるの？
アートプログラム「ART LEAP 2018」

2017年4月より運営体制を一新して、あっという間に1年半。
2018年度から新しく公募プログラム「ART LEAP」がスタートしました。
今年度審査員の建畠晳氏と、選出されたパフォーマンスユニット「tuQmo（つくも）」、
お三方は、2019年2月の展示に向けて、どんなことを考えているのでしょうか。

photo: 松見拓也

ERIKA RELAX［ポールダンサー］
2014年MissPoledanceKorea優勝、2014〜2016年ユニバーサル・スタジオ・ジャパン チャイニーズポールダンサー、2015年京都国際芸術やなぎみわトレーラープロジェクト、2015〜2016年3代目JsoulBrothersドームツアー、EXILE tribe HIGH&LOWtheLIVEドームツアー、2017年池田精堂氏が造形作を手がける、漆塗りのオリジナルポールを用いたパフォーマンスを製作発表。
https://erika-relax.com/

建畠晳［美術評論家/詩人］
1947年、京都府生まれ。早稲田大学文学部仏文学科卒業。「芸術新潮」編集者、国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授、国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長を経て、現在、多摩美術大学学長。全国美術館会議会長。埼玉県立近代美術館長、京都芸術センター館長、草間彌生美術館長を兼任。2010年にあいちトリエンナーレ、2017年に東アジア文化都市京都のメーン事業「アジア回廊」展の芸術監督。

池田精堂［美術家］
主に木や金属などの素材を用い、美術、デザインなどのジャンルや表現形式に関係なく物をつくっている。自分がつくる「もの」と「他者」の接点のあり様についていつも考えている。だれとどのような状況でこの2つが触れ合うのか、その方法や環境を自分を取り巻く社会のなかに見つけ、ものと身体、ものと社会の関係と可能性をいろいろな視点から探っていくことをテーマに活動している。

建畠晳×tuQmo（ERIKA RELAX×池田精堂）

神戸アートビレッジセンター（KAVC）は、2018年度から30〜40代の芸術家のステップアップを応援するべく、新たに公募プログラム「ART LEAP」を立ち上げました。2018年5月19日には最終審査を兼ねた6組の作家による公開プレゼンテーションが行われ、その結果、応募総数64組のなかから、ERIKA RELAX×池田精堂によるパフォーマンスユニット「tuQmo（ツクモ）」がART LEAP 2018の出展作家に決定。今回の座談会では、建畠氏、そしてtuQmoのおふたりと、本プロジェクトの現在地に触れていきます。

パフォーマンスユニット「tuQmo」とは……
ポールやエアリアルフープなどを使った空中パフォーマーであるERIKA RELAXと美術家の池田精堂によるパフォーマンスユニット。独自のスタイルや表現を求める時、最もシンプルな方法のひとつとして、オリジナルの道具をつくることがあげられる。そこで、使い手となるERIKA RELAXに、つくり手である池田精堂が新しい「道具」をつくる。互いの持つ技術や身体と物の関係、そこに派生してくる次の可能性について、さまざまな視点で探りながら活動している。

※1「技術の交点」『思考する技術　Artist Social Reproduction』（2018年/京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）

パフォーマンスと装置が織りなす新しい「サーカス」のかたち

建畠：ART LEAPは、とてもユニークな試みだなと思っています。こういった公募プログラムは、年齢制限を設けないか、35歳以下を対象にすることが一般的です。しかし今回は、30〜40代の中堅層を対象にし、つくり続けている人たちを応援している。また、会場を展示室とオルタナティブスペース、スタジオと3箇所準備していることも、これまでにない表現に挑戦できる環境だなと思います。「総合的に使わないと！」という気持ちにさせるのか、4月の一次審査でもジャンルを組み合わせた企画の応募が目につきました。

池田：公開プレゼンの時にも感じましたね。

建畠：そのなかでも池田さんとERIKAさんの企画は、KAVCシアターが作品発表の中心となりつつも、発想自体には美術的・パフォーマンス的な要素があり、それらが合わさって成立するようなものでした。ポールダンスの枠に留まらない「サーカス」のような[※1]。純粋に、どんなことが起こるのか見てみたいと思って、選定させていただきました。これからお話を聞いていきたいのですが、まず、おふたりのコラボレーションのきっかけについて教えてください。

ERIKA：出会いは2年ほど前、わたしがダンスの練習場所を探していた時に、知人からスタジオを紹介してもらって。たまたま精堂さんが所属する共同スタジオだったんです。

池田：僕が1階で木工作業、ERIKAさんが2階でダンスの練習をしている時期が1年半くらいありましたね。その間に、僕の作品を使ってパフォーマンスしてもらえたら面白いなという気持ちが湧いてきて。

ERIKA：あるとき、日本舞踊の舞台への出演が決まり、「せっかくなら精堂さんにつくってもらおう」と思って、相談したのがきっかけでしたね。ダンスでは、ポール以外にもエアリアルフープを使うのですが、ほかにもいろんなものを使ってパフォーマンスをしてみたいと思っていた時期でもありました。

池田：僕は大学時代には彫刻を専攻していたのですが、自分のためにものをつくったり、感情をかたちにしたりすることに気持ちが乗らず、悩んでいました。ただ、自分のつくったものに人が関わる様子を見ると、妙な興奮と身体的な感覚の飛躍を覚えるんです。きっと誰かに作用することを前提に、物事を考えるほうが僕には合っているのでしょうね。そんな折に、ERIKAさんとの共作が決まりました。

建畠：ERIKAさんから見ると、舞台装置や道具は〝ダンスの動きを引き出すもの〟だと思います。けれども、今回は、ある意味やりにくい条件を突きつけられているとも言える。池田さんがつくるものに対して、どんな可能性を感じているのでしょう？

ERIKA：私にとって「作品」と呼ばれるものは、飾られたものを遠くから眺めるだけでしたが、精堂さんと一緒に取り組むことで、作品に触ることができるし、それを用いたパフォーマンスもできる。逆に、作品の多面性や魅力を引き出すこともできると思ったんです。

建畠：なるほど。3年前、フランス・アヴィニョンの芸術祭で「シルク・イスィ（cirque ici）」というパフォーマンスを観ました。彫刻家によるひとりサーカスなのですが、造形的な要素がパフォーマンスと一体化している点で、おふたりが試みようとしていることにも近い。ただ、これからtuQmoがつくっていくものは、パフォーマンスと装置としての彫刻、ふたつの関係を生かしていくような構想ですよね。それがほかにはないところだと僕は思っています。

道具を使うことで生まれる動きと、道具があることで導かれる動き

建畠：池田さんが「こんな動きが良い」と演出することはないけれど、道具は動きを誘発しますよね。それを意識して設計することはあるんですか？

池田：「こう動いてほしい」という気持ちはありますが、それよりも安全性が第一で、素材選びは重要ですね。道具としてうまく使える、美しく見えることも意識しつつ、つくり手・使い手にとっての不自由さがあることが面白い。そういった自らが抱くイメージと、できるものの不一致は、つくり手として保っておきたいバランスでもあります。

ERIKA：私も似た部分があります。単に自分のイメージを具現化するための道具という認識だけでなく、道具そのものから導き出される動きというのも意識せざるをえない。道具との相乗効果で、想像を超えて面白い化学反応が生まれていくのを感じていて。

建畠：なるほど。この企画を最初に聞いたときは、ダンサーと装置のコラボレーションだと思っていました。それは実際に間違いないけれど、池田さんも舞台に上がって体を動かしたり、重心を変えたりしている。そこはどのようにとらえていますか？

池田：最近になって、僕とERIKAさんの立場や関係性をよく考えます。参考にしたのは歌舞伎や文楽。それぞれ主役を動かす黒子がいますよね。後ろで着物をまくって立ち姿をフォローしたり、道具をさっと出したり。必要な存在であり実際に見えているけれど、観ている側は「見えてない体」で観る。

建畠：歌舞伎や文楽の人形使いの黒子と違うのは、人形を黒子自身がつくっている。誰よりも活用の仕方や動きとの関わりがわかっていますよね。だから、池田さんが黒子に徹するほど、装置の作者としての存在感との絡み合いを我々は観るわけで、それが面白い効果を擁しているのだと思います。

3番目の出演者となるキャラクター／舞台装置

池田：tuQmoは「道具」をテーマにしていますが、僕とERIKAさんの考える「道具」は、言葉としては同じでも、接し方や想いは異なる気がしています。僕は、ものに加工するための道具、利便性を求めたものとして考えていますが、ERIKAさんは少し違う。

ERIKA：新体操をやっていた時期、例えばリボンやボールを使うにも「友だちだと思って仲良くなりなさい」と言われる環境だったので、ものでも擬人化して向き合うんですね。だから精堂さんのつくったものも、最初はよそよそしいけれど、何回も使っていくうちに愛着が湧いて、最後にはすごく好きになる。

池田：最終的には舞台上で、僕とERIKAさんともうひとり、道具に宿った〝何か〟が現れるような、道具が立つ瞬間もあっていいと思っていて。僕たちが舞台装置をどう扱うかで、その関係性から見る人は道具に宿るものを想像したり、気づいたりしてくれるんじゃないかなと。能における「見立て」に近い。

ERIKA：そういった精堂さんとのやりとりから、ユニット名も「tuQmo」に決まりました。日本に伝わる妖怪譚で「つくもがみ」というものがありますが、道具が使われ続けて100年経つと、化けて足が生え妖怪になり、人を惑わす（笑）。

池田：僕たちの、道具との関係性が見える言葉だなと。

建畠：なるほど。冒頭の話題に戻りますが、この公募プログラムの特色は、展示室とオルタナティブスペースとスタジオという毛色の違う空間を総合的に使えるということ。tuQmoが最終的にどんな展示にするつもりなのか、教えていただきたい。

池田：地下のKAVCシアターでは実際にパフォーマンスを行い、同フロアのスタジオで映像作品を投影する予定です。ここではERIKAさんが主役。1階KAVCギャラリーでは、僕の視点で試作品や模型などを博物館的に展示しようとしています。抽象的なかたちのものも、既製品として意味のあるものも、資料として同列に並べていくような構想です。

建畠：パフォーマンスは毎日行うのですか？

池田：体力的なものもあるので、公演の日時を決めてできたらいいなと思っていますね。

建畠：継続的に公演するのは、はじめての経験だと思いますが、ここまで本格的に打ち込めると、途中で考え方や方法なんかも変わってきそうですね。

ERIKA：はじまって何日かで、ふたりともすごく変わると思います。舞台に立った精堂さんの見え方も変わるんじゃないかな。

池田：最初に決めたことを、最中にある程度更新しながら、やりたいことをやれたらいいなと思います。

ART LEAP 2018「道具とサーカス」
会期：2019年2月23日（土）〜3月17日（日）
会場：KAVCギャラリー、KAVCシアター、スタジオ3
出展作家：tuQmo（ERIKA RELAX×池田精堂）

関連イベント

「オープニングトーク」
2月23日（土）　会場：1room
出演：建畠晳（美術評論家・詩人・ART LEAP 2018審査員）、tuQmo（ART LEAP 2018出展作家）

「tuQmoパフォーマンス」
会期中の水・木・土・日曜日
会場：KAVCシアター
※詳細はWebサイトをご確認ください

「ERIKA RELAX ワークショップ はじめてのポールダンス」
3月2日（土）　会場：スタジオ1
講師：ERIKA RELAX
※クラスを子どもと大人に分けて開催

「tuQmo ワークショップ」
3月9日（土）　会場：KAVCシアター

「クロージングイベント 道具とサーカス座談会」
3月17日（日）　会場：KAVCシアター
出演：tuQmo、本展関係者

神戸アートビレッジセンター
Kobe Art Village Center

ART VILLAGE BIG VOICE

ISSUE 87
Jun.–Mar. 2019

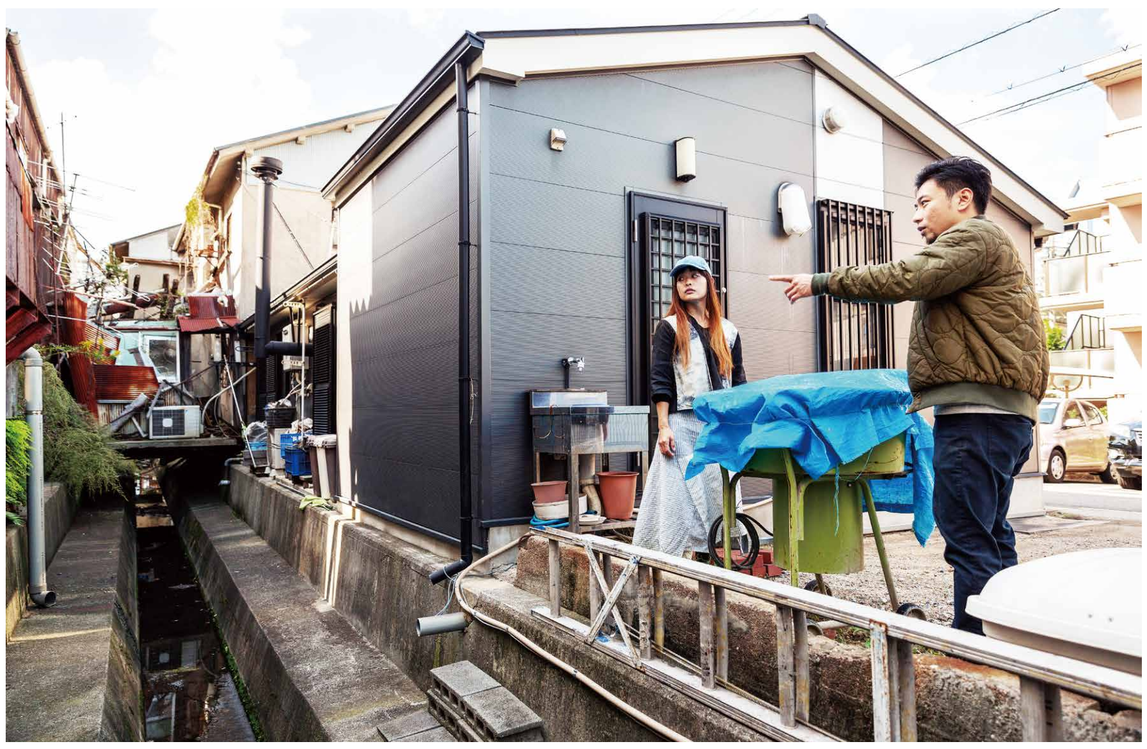
ART VILLAGE VOICE vol.87
発行日：2018年12月24日
発行元：神戸アートビレッジセンター
指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
TEL 078-512-5500　FAX 078-512-5356
開館時間 10:00-22:00
休館日 毎週火曜日（火曜が祝日の場合は翌日）・年末年始
編集ディレクション＆編集：多田智美・永江大（MUESUM）
編集アシスタント：妹尾実津季（MUESUM）
アートディレクション＆デザイン：仲村健太郎

KAVCと行く！
新開地探訪
～道具と人とまちのスケールを感じる編～

神戸アートビレッジセンターを訪れたアーティストや制作者、研究者とともに神戸・新開地のまちを徘徊してみる特集企画。今回は、KAVCが主催する公募プログラム「ART LEAP 2018」より、出展作家tuQmo（つくも）（ERIKA RELAX×池田精堂）のおふたりと、作品制作のリサーチも兼ねて神戸新開地エリアを歩きました。以前より、京都の美術館・博物館を訪れ、展示に向けてリサーチを進めてきた彼ら。この機会にあらためて、このまちを眺めてみます。

今号の探訪者　**ERIKA RELAX**さん（ポールダンサー）と **池田精堂**さん（美術家）

text: 編集部 / photo: 松見拓也



10月半ばの神戸は、秋晴れの気持ち良い気候に包まれ、外を歩くには絶好の日和。2月からはじまる展示に向けてリサーチを進めるtuQmoのふたりと、今回の展示で重要なキーワードとなる「道具」に関係する場所へ足を運ぶ。普段から木工道具などに触れる機会の多い池田さんがERIKAさんと向かったのは、新神戸駅近くにある「竹中大工道具館」、そして新開地を東に行った沿岸部の造船所だ。

品質の良いものほどよく使われ、摩耗して後世に伝わらないとされる大工道具。文献や映像資料、さまざまな種類の道具を含め約35,000点（2018年11月現在）の資料が収蔵された道具館では、大工道具の文化と進化・伝播の変遷が常設展示で紹介されている。「情緒的な表現が少なく、純粋な道具とその歴史が見られ、またそれがすごく厚みのある展示になっている」と絶賛の池田さん。大陸から渡ってきた道具の数々は、やがて日本の風土に合わせたかたち・使われ方へと収まっていく。例えば、鉋（かんな）には腰を落として、腕を奥から手前へ"ひく"動作がある。これはほかの大工道具にも多く付随する動きで、日本の木材の質や職人の性質、建物のつくられ方など、さまざまな要素に起因する。

photo: KAVC

曽祖父、祖父も棟梁だというERIKAさんは「宮大工・西岡常一さんの道具や書かれた図面を見て、そこに現れている熟練の跡、立ち昇ってくる職人の魂のようなものに感じ入ります」と食い入るように展示を見ていた。

大工や左官といった職人による手仕事が寄り集まって、家屋や建築物がつくられ、まちがつくられていった一方で、現代は、より効率良くつくることのできる建材と方法、デジタル工作機器などの新たな道具の開発が進んでいる。これまで、大工のような職人は道具を手の延長に置き、その感覚を身体と同期させていくことを熟練としたが、現代においても「使い手」と「道具」の関係性は変わらないのだろうか。そして、そのとき「道具」が指し示す範囲とは？

立ち昇ってくる職人の魂のようなものに感じ入ります。（ERIKA）

次に向かったのは、神戸港内に浮きドックをもち、船舶の修理・整備・管理を行っている「鹿瀬造船」と「新神戸ドック」だ。その日も船のメンテナンス作業が進められていた。「わたしたちにとっては、このドックが道具のひとつです」と、案内をしてくださった鹿瀬造船の社長が一言。手の延長というより、もはや"環境"ともいうべきスケールの道具だ。作業中の甲板の上を歩くと、錆びたところを自分たちで鉄板を当てて修理し、常に手を加えながら仕事をしているのがわかる。「ドックという道具の上で道具を使い、船という道具を修理している。そんな風景がここだけでなく沿岸部のいろんな造船所にある」と池田さん。

ドックという道具の上で道具を使い、船という道具を修理している。（池田）

KAVCへと戻る道すがら、用水路の真上に建てられた倉庫のような廃屋と出会う。何か必要に迫られて、水路の上という場所に（おそらく誰の許可を得るでもなく）築き、水辺の風景を変えたある種の力強さが周辺の雰囲気をつくり出している。

池田さんが最後に「手から道具の末端へと感覚をめぐらせて身体の一部として使っていく、その延長線上に、今日見たドックのような環境自体もある気がする」とぽつり。その言葉のなかの"環境"を"まち"に置き換えることもできるだろう。そして、すでにこのまちには、領域を超えて関わろうとする積極的な使い手がごろごろしているのだと、水路の上の廃屋が物語っている。

神戸みちくさ天国

神戸アートビレッジセンターで日々開催される、さまざまな催しごと。
合わせて「せっかくならここも行っとき～！」と背中を押したい、
魅力的な道草スポットをご紹介。

title: 三重野龍 / illustration: 谷小夏

KAVCで関西が誇るランドマークこと、『太陽の塔』のドキュメンタリー映画を観る

1970年に開催された大阪万国博覧会のシンボルとして知られ、今もなお人々を惹きつけ続ける《太陽の塔》。前衛芸術家・岡本太郎氏によるこの奇異な彫刻作品のありように迫るべく、設計・制作関係者や各分野の専門家へのインタビュー、岡本氏が同時期に手がけた《明日の神話》の構想などから、作品を紐解いていくドキュメンタリー。そんな映画にちなんで新開地のシンボリックなスポットを巡り、その佇まいと歴史を味わってみるのはいかがでしょうか。その場所ならではの特徴やエピソードに触れることで、新しいまちの姿が浮かび上がってくるかもしれません。

2019年2月2日（土）よりKAVCシアターにて上映
『太陽の塔』（2018年／112分）
監督：関根光才

©2018映画『太陽の塔』製作委員会

©2018映画『太陽の塔』製作委員会

KAVC EVENT SCHEDULE
2019.1–3

1 JANUARY

5日（土）—6日（日） 会場：KAVCシアター
Fの階「なにごともなかったかのように再び始まるまで」関連企画
演劇体験ワークショップ『劇場で台詞を読む/聴く』
講師：久野那美（Fの階代表/劇作家・演出家）、Fの階出演者

12日（土）—18日（金） 会場：KAVCシアター
「新春！ニッポンの喜劇映画セレクション 第二弾」
上映作品：『お父さんはお人好し』『待って居た象』など8作品　ゲスト：大村崑

24日（木）—28日（月） 会場：KAVCギャラリー
田岡和也展「兵庫景！アンコール!! おまけ付き!!!」
参加作家：田岡和也（画家）

26日（土） 会場：1room
ART LEAP 2018　関連企画
トーク「展覧会をつくる仕事—設営・施工の視点から—」
講師：和田雅弘（株式会社Studio Sawna）、池田精堂（美術家/Exhibition technisian）

27日（日） 会場：KAVCギャラリー
節分ワークショップ「色とりどりの鬼のお面をつくろう！」
講師：田岡和也（画家）

2 FEBRUARY

1日（金） 会場：会議室2
NTL講座『ジュリアス・シーザー』の見所
講師：桑山智成（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

2日（土）—15日（金） 会場：KAVCシアター
KAVC CINEMA
『ニューヨーク、ジャクソンハイツへようこそ』（2015年/アメリカ・フランス/189分/配給 チャイルド・フィルム、ムヴィオラ）
監督：フレデリック・ワイズマン
『太陽の塔』（2018年/日本/112分/配給 パルコ）
監督：関根光才
『チェコ・スワン』（2015年/ポーランド・チェコ/52分/配給 コピアポア・フィルム）
監督：アレクサンドラ・テルピンスカ

ナショナル・シアター・ライブ『ジュリアス・シーザー』
作：ウィリアム・シェイクスピア｜出演：ベン・ウィショー、ミシェル・フェアリー

ナショナル・シアター・ライブ『ヤング・マルクス』
作：リチャード・ビーン、クライヴ・コールマン｜出演：ロリー・キニア、オリヴァー・クリス

15日（金）—17日（日） 会場：リハーサル室2
『Julia Ehrstrand Workshop in KOBE—メソッドクラス・クリエーションクラス—』
講師：ジュリア・イーストランド

15日（金），22日（金） 会場：会議室2
NTL講座『ジュリアス・シーザー』台詞解説（前半・後半）
講師：桑山智成（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

23日（土）—3月17日（日）
会場：KAVCギャラリー、KAVCシアター、スタジオ3
ART LEAP 2018「道具とサーカス」
参加作家：tuQmo（ERIKA RELAX × 池田精堂）

tuQmo パフォーマンス
会期中の水・木・土・日曜日※詳細はWebサイトをご確認ください。
会場：KAVCシアター

オープニングトーク
23日（土） 会場：1room
出演：建畠晳（美術評論家・詩人・ART LEAP 2018審査員）、tuQmo（ART LEAP 2018出展作家）

ERIKA RELAX ワークショップ「はじめてのポールダンス」
3月2日（土） 会場：スタジオ1
講師：ERIKA RELAX

tuQmo ワークショップ
3月9日（土） 会場：KAVCシアター

クロージングイベント「道具とサーカス座談会」
3月17日（日） 会場：KAVCシアター
出演：tuQmo、本展関係者

3 MARCH

21日（木・祝）—24日（日） 会場：KAVCホール
エクステ#5『STRAWBERRY MOON』
作・演出：大塚雅史

22日（金）—25日（月） 会場：KAVCシアター
Fの階「なにごともなかったかのように再び始まるまで」
脚本・演出：久野那美

28日（木）—31日（日） 会場：KAVCシアター
KAVC CINEMA

新開地新名物 KAVC認定

vol.4
ポートピア神戸新開地の「警備員のおっちゃん」

title & frame: 廣田愛 / illustration: 黒木雅口

制服の青色の鮮やかさ　★★★★★
朝のポートピア開場時警備員数　約20名
交通整理熟練度　★★★★☆

連日大賑わいの場外発売所周辺で交通誘導を行う、警備員のおじさんたち。和やかな商店街の交差点に2名配置され、「よっしゃ、車1台いくよ～」と掛け合う声が、今日もまちを活気づけています。
ポートピア神戸新開地　神戸市兵庫区新開地4-6-19

ここは競艇を愛する者の憩いの場。周辺を守るのは一体何人いるの！？と見紛う人数の警備員さん。彼らのおかげで今日もご安全！

推薦者
羽仁真理子さん［KAVC地域事業担当］

その前に　能福寺で、兵庫大仏を拝む！

805（延暦24）年に最澄が創建した日本で最初の教化霊場とも言われる仏教寺院。境内には日本三大大仏のひとつに数えられる巨大な大仏が鎮座し、「一願成就の大仏さま」としても知られています。大切な願いごとを叶えてくれるかも？

能福寺　神戸市兵庫区北逆瀬川町1-39

その後に　新開地商店街で、チャップリンを探す！

新開地商店街の入口に立つ、チャップリンのシルエットをかたどったシンボルゲート。通称「ビッグマン」。かつて神戸市の中心地として栄えた新開地は映画のまちとしても知られ、1936（昭和11）年にはチャップリンも訪れたそう！

ビッグマン　神戸市兵庫区新開地6

わたしのとびきり！ランキング 2018

2018年の催しから選ぶ、スタッフのマイベスト3！

館長・大谷燠のマイベストは……

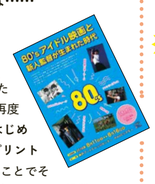
1位「KAVCアートジャック2018」 KAVC全館を使い迷路を探検するように"場"と公演のコラボを堪能。**2位 澤崎賢一監督『動いている庭』** 仏の庭師ジル・クレマンを追った映像作品。草木が自然の推移とともに移動し、そのなかで庭が構成されていくことに感動。**3位「新開地カブキモノ大興行」** 新開地舞踊歌劇団と土地のもつカオスと寛容性がマッチしたプログラム。

総務チーフ・林正樹のマイベストは……

1位「ART VILLAGE VOICE リニューアル！」 1年の休刊を経て大幅リニューアルを果たした本誌。手前味噌ですがもっと面白くなる予感！ **2位「###（メッシュ）4号カタチプリント発売開始！」** なかなか出会えない、楽しく実践的なシルクスクリーン技術書を、自分たちでつくってみました。 **3位「消防訓練＆市民救命士講習」** 10月末の休館日にスタッフ全員参加。日々の備えと心構えは重要ですね。

総務担当・山本聡之のマイベストは……

1位 特集上映「80'Sアイドル映画と新人監督が生まれた時代」 アイドルに興味を抱く年頃に観た作品を、年齢を積み重ねた今、再度触れて懐かしさで一杯。 **2位 はじめてのシルクスクリーン「カタチプリントで顔ハンカチを作ろう」** 体験することでその魅力を感じられた。もっと高度なものに 挑戦したい！ **3位 匣の階「パノラマビールの夜」** 演劇は理解するより感じるものと知った印象作。



映像アシスタント・河合なおのマイベストは……

1位 新春！ニッポンの喜劇映画セレクション「親バカ子バカ」 50年以上前の作品ですが、藤山寛美演じる愛すべきボンはフィルムの劣化も気にならない絶品。 **2位 チェコスロヴァキア・ヌーヴェルヴァーグ『ひなぎく』** 超絶可愛く憎たらしい2人のマリエ。可愛いは正義！もしくは狂器！ **3位 ナショナル・シアター・ライブ『ハムレット』** 改めてカンバーバッチ人気を実感。他作品も勉強しないと！

KAVC REVIEW これ見た？

今回、取り上げる催しは、
山猫団×三田村管打団？×新開地舞踊歌劇団
「新開地カブキモノ大興行」

ART
開催日時
2018年11月25日（日）13時～

こんな企画でたよ♪人情溢れる新開地の魅力を発信し、まちの方々と一緒にダンスを楽しみたい！というKAVCの想いからはじまった本企画。ダンサー、パフォーマー、一般公募の方々とともに、新開地本通商店街を練り歩きました！

今号のレビュアー
小岩秀太郎さん［ダン活コーディネーター・東京鹿踊］

"リメンバー　生まれた時だれでも言われたはず
耳をすまして思い出して　最初に聞いたウェルカム"（中島みゆき『誕生』）

いまだ頭のなかで鳴り止まない歌。歌の上には大きな花が見事に咲いている。歌の下には泥のなかの蓮花のような生まれたての踊り手たち、人々をなだめ喜びをみなぎらせていく楽隊。年齢性別凸凹な観客たちが、歌や音楽や踊りをぐるり囲んで見つめ、拍手し、体を揺らしている——11月25日、湊川公園から新開地商店街を奇抜な衣装と動きで"行列"しながら、そこを通りかかった、そこに住む、そこが好きな、そこが嫌いな、あらゆる新開地人を呑み込みつつ、KAVCホールまでまんまと丸ごと新開地を連れてきた「大興行」のフィナーレシーンが目に焼き付いて離れない。

この"興行"は、（一財）地域創造「公共ホール現代ダンス活性化事業（ダン活）」の一環で、コンテンポラリーダンスのアーティストを公共ホールに派遣し、ホールと一緒に地域を知り交流し創造する企画から生まれた。KAVCスタッフがホールを飛び出し、文化芸術など腹の足しにならないと言うだろう道端のおっちゃんたちや、イメージアップを進めたい商店街に対し、「ダンス」のような「文化芸術」でも、新開地人の未来を創造していく可能性を見出せるはず！と、ダンサーの長井江里奈率いる「山猫団」、地元神戸の「三田村管打団？」とともに挑戦したのである。長井には人の能力を引き出し巻き込んでいく才があった。9月の1日体験（ワークショップ）には新開地内外から15名の参加者が集まったが、呼び文句は「あなたの夢」。将来の夢、叶わなかった夢、持ち続けている夢、夢を花開かせるためにそれぞれの天性の才能を、身体を使った表現のなかから長井が引き出し、「人間博覧会」と称した作品として大興行で発表したが、まさに新開地の縮図だった。おっちゃんもタバコ屋も理容師も串揚げ屋もダンサーも、なんらかの能力を持っていて、それらを寄せ集めていった時、魅力ある街が出来上がる。

この度、19歳から83歳までの13名による「新開地舞踊歌劇団」がKAVCに生まれた。アーティストや外の人が新開地やKAVCを訪れた時、この舞踊団が新開地の魅力を伝える表現媒体になっていたら……と思うと、ワクワクする。そしてこの歌や踊りが継がれていくことを願っている。

"わたしいつでもあなたに言う
生まれてくれてウェルカム"

photo: 新田さやか
三田村管打団？の賑やかな音色につつまれる商店街のアーケード

KAVC前の通りをパフォーマーとともに歌い歩く山猫団・長井さん

KAVC保安のおっちゃん今昔物語

作・画 鈴木裕之

KAVC保安のおっちゃん今昔物語とは……

本館の隠れた主役、保安のおっちゃん3人衆が、ふとした瞬間過去にタイムスリップ？！　KAVCのいまと古き良き新開地をちょっとだけ味わう、ドタバタ今昔コメディです。

作・画　鈴木裕之（すずき ひろゆき）さん

本誌を機会に新開地デビューを果たした大阪出身・在住のイラストレーター。女性ファッション誌『SPUR』にて4コマ漫画「森のおしゃれっ子動物」を月イチ連載中！

今号のネタ

いま

エクステ#5
「STRAWBERRY MOON」

Photo: 河西沙織

日時：2019年3月21日（木・祝）-24日（日）
会場：神戸アートビレッジセンター

演劇ワークショップ「Go! Go! High School Project」（通称：ゴーハイ）の卒業生を中心として、演出家・大塚雅史氏とKAVCが2014年に立ち上げた劇団。卒業生は100人を越える。

むかし

神戸タワー

今から約95年前
大正時代

資料提供：神戸市文書館（レファートコレクション）

1924年に新開地の湊川公園内で開業し、1968年に解体された展望塔。「東洋一の300尺（約91メートル）」をうたい人々に親しまれましたが、実は台座で上げ底されていたため、本来の高さは約57メートルだったと言われています。

STAFF's VOICE

→詳細はWebにて！

STAGE

演劇／ダンス担当・竹下のオススメは、**エクステ＃5「STRAWBERRY MOON」！**

高校生のための演劇ワークショップ『Go! Go! High School Project』卒業生の劇団「エクステ」も早5回目の本公演。改めてすごいなと思うのは、着実に成長を遂げる彼・彼女らの姿。それはもはや演劇が好きな若者の域を越えて、"役者"そのもの！　芝居にかける熱い情熱で観る人の心を揺さぶります。必見！

Photo：堀川高志

CINEMA

事業アシスタント・沖のオススメはKAVC CINEMAで上映する**「太陽の塔」！**　太陽の塔とは何か。その問いを通して、自分の生き方や現代社会について考えさせられる映画です。考えて、考え抜いて、しがらみを突破したその先の形容できない感情の高ぶりを表現せよ！　行動せよ！　それでこそ人間だ！　画面から伝わる岡本太郎の熱量をぜひ劇場でご覧ください！

©2018映画『太陽の塔』製作委員会

ART

美術担当・岡村のオススメは、トーク**「展覧会をつくる仕事―設営・施工の視点から―」！**　数多くの展覧会に携わり作家からの信頼も厚い株式会社Studio Sawnaの和田雅弘さんと、美術家として活動しながらフリーランスで展示設営を手がける池田精堂さん。おふたりのお仕事を紹介するとともに、アートの現場の重要な職業として注目すべき展覧会設営のお仕事に焦点を当てます！

OTHERS

事業チーフ・近藤のオススメは、**「Marching KOBE」！** KIITO、C.A.P、ファッション美術館、KAVCの4つの文化施設が集まって実施している連携企画ですが、2月24日（日）に各館の企画紹介や裏話、最近の文化事情などを交えたトークイベントをC.A.P.にて開催します。文化の好きな方、裏話の好きな方、文化施設に興味のある方、どなたさまでもお越しください！

Marching KOBEミーティングの様子

神戸アートビレッジセンター

www.kavc.or.jp
指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
TEL＝078-512-5500　FAX＝078-512-5356
開館時間＝10:00-22:00　休館日＝毎週火曜日
（火曜が祝日の場合は翌日）・年末年始

アクセス
・神戸高速「新開地駅」8番出口より徒歩約5分
・JR「神戸駅」ピエラ神戸口より徒歩約10分
・神戸市営地下鉄「湊川公園駅」東改札口より徒歩約15分

ART VILLAGE VOICE vol.87　発行日：2018年12月24日　発行元：神戸アートビレッジセンター（指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団）
編集ディレクション＆編集：多田智美・永江大（MUESUM）編集アシスタント：妹尾実津季（MUESUM）アートディレクション＆デザイン：仲村健太郎　撮影：松見拓也（NEW KAVC/新開地探訪）　イラスト（内面）：谷小夏、黒木雅巳　題字（内面）：廣田碧（看太郎）、三重野龍　漫画：鈴木裕之